

下程勇吉著『廣池千九郎の人間学的研究』刊行に 込められた大澤俊夫先生の感謝と報恩の心

立木 教夫

大澤俊夫先生は、一九九八〔平成十〕年三月十七日に九十三歳で永眠された下程勇吉先生のご著書、『廣池千九郎の人間学的研究』（二〇〇五〔平成十七〕年）〔以下、『研究』と略す〕を編集出版するに当って、深い配慮をもって臨まれました。

『研究』が完成したとき、大澤先生は「下程勇吉著『廣池千九郎の人間学的研究』刊行の意義」という文章を発表され、「このたび、故・下程勇吉先生の大著『廣池千九郎の人間学的研究』が、めでたく出版されました。下程勇吉先生が昭和四十九年四月にモラロジー研究所研究部の顧問に就任されて以来、二十数年にわたり『道徳科学の論文』（全十冊）、『廣池千九郎日記』（全六冊）をはじめ、廣池博士の諸著作や『廣池千九郎資料集』（全百四十八冊・未刊）を、丹念かつ、つぶさに読破されたうえ、深い思索を重ねながら、まとめられたものです」と研究基盤を明らかにされ、「下程先生の手により、モラロジー創建という廣池博士の一大業績を、日本思想史の中に位置付けていただいた」ものであるとその意義を明らかにされ、「モラロジー研究所にとっても、一門弟の私にとっても、この上ない喜びです」と真情を吐露されました（大澤俊夫

『師の心を求めて』、一〇四—一〇五ページ)。ここからも窺えるように、『研究』刊行は感謝と報恩の心で貫かれていたのです——つまり、『研究』刊行には、第一に、下程勇吉先生の師恩に対する感謝と報恩、第二に下程先生がモラロジーならびに廣池千九郎研究に真正面から取り組まれ、廣池千九郎の思想と生涯を貫く生の鉤脈を明らかにする多くの業績を残されたことに対する感謝と報恩、第三に精神伝統である廣池博士に対する感謝と報恩の心が込められていたのです。

*

『研究』刊行事業につながる最初の契機は、二〇〇一〔平成十三〕年七月二十九日、下程勇吉先生のご子息・下程息先生から、ダンボール二箱分の著書と書簡が、大澤先生宅に送られてきたことにあります。また、私がこの刊行事業に関わることになったきっかけは、二〇〇一年の秋の谷川出講の際、大澤先生から、下程先生の書簡の整理をしてほしいと依頼されたことにあります。これが約四年間にわたる『研究』の編集刊行事業のはじまりでした。

目標は、下程勇吉先生の七回忌（二〇〇五〔平成十七〕年三月十七日）に、ご霊前にお供えできるような著作を準備することでした。しかし、当初、その著作がどのようなものになるのか、明確なヴィジョンがあったわけではありません。谷川での大澤先生のお話が「書簡の整理」ということであつたように、最初は、京都学派の学者からの書簡を解説し、一冊の本または資料集にすることを、考えていらつしやつたのかもありません。解説に当っては、道德科学研究センターの二人の研究員、足立智孝さんと橋本富太郎さんに参加してもらい、「下程勇吉先生寄贈資料等の整理事業」と命名し、大澤先生中心の委員会をスタートしていただきました。

二〇〇二年二月七日に「第一回 資料作業部会」が開かれ、ここでの検討内容を踏まえて、三月十三日に、大澤先生とご一緒に、廣池幹堂理事長に「下程勇吉先生寄贈資料等の整理事業」の内容を報告させていただきました。また、「第二回 資料作業部会」は五月七日に開かれ、このときから書簡の解読作業がスタートし、八月二日には、京都から下程息先生をお迎えして、「第一回 下程勇吉先生関係資料研究会」が開かれました。勉強会では興味深い資料について話題提供をさせていただいたり、息先生からさまざまなお話をきかせていただいたりしました。研究会の後には、息先生に麗澤大学図書館の「下程勇吉文庫」をご覧いただきました。ご寄贈いただいた下程勇吉先生の著書もすでに配架されました。文庫には、和書三四二七冊、洋書二三五冊、中国書二冊、計三六六四冊が収蔵されており、息先生は、美術の本をご覧になりながら、懐かしいとおっしゃり、このようにきちんと保存していただいて大変有難いと、感謝の言葉を述べられました。八月八日には、息先生から書簡の追加寄贈がありました。この書簡の中には未発見のものも含まれており、それらは岩波の最新版の『西田幾多郎全集』に収録されています。また、ボルノー博士やキュンメル博士からのドイツ語の手紙は、息先生が翻訳してくださることになりました。大澤先生は、八月八日に、この間の活動経過を廣池幹堂理事長にご報告されました。

*

二〇〇三〔平成十五〕年四月二十二日に、下程勇吉先生がモラロジー研究所および廣池学園関係の雑誌等に発表された論文やエッセーを抽出・収録した業績ファイルを作製しました。大型のA4ファイル二冊が膨れ上がるほど大部の業績を残されていたことがわかりました。大澤先生は、このファイルに目を通しながら、下程先生のご著書のあるべき姿を構想されていたと思います。

十月十六日、私は、顧問室において出版に関する大澤先生のお考えを聞かせていただきました。本については、基本的に、「下程先生の「モラロジー研究の成果」に絞って出版するとされ、論文を中心とし、追憶、手紙などをすべてまとめて、一冊とする。ここには先生の最後の著書である『日本の精神的伝統』も入れ、ブックメイツに入れてもらうことを考える、とおっしゃいました。予算措置については、研究センターの予算に「下程勇吉先生論文集記念出版予算」という項目を立てられ、「研究センター顧問として責任をとるから安心してよろしい。理事長にも申し上げる」とおっしゃいました。また、編集方針については、年が明けてから谷川で合宿をして検討するとされました。

二〇〇四年二月十日から十二日にかけて、谷川で編集会議が行なわれました。大澤先生は、谷川合宿の目的を、「下程勇吉先生のモラロジーならびに廣池千九郎博士に関わる研究成果を一冊の本にまとめて出版し、七回忌にご霊前にお供えさせていただくための編集作業である、と明確にされました。参加者は、大澤先生、足立さん、橋本さん、そして私の四人でした。精読とディスカッションを行いながら、構成と章立てを検討しました。大澤先生は、本のタイトルを『廣池千九郎の人間学的研究』とし、第一篇に、「普遍的道德の開拓者廣池千九郎」と「最高道德の核としての神・聖人・人間」という二本の論文を置くことを提案されました。先生は、モラロジアンの方々にぜひこの二本の論文は読んでもらいたい、そのために本のはじめに置きたいと話されました。第二篇としては、「下程先生の間像を偲ぶよすがとなるものを取り上げる」とされ、「若い人に贈る言葉」や「次代を背負う人々に向けたメッセージ」を入れたいといわれました。

二〇〇四年二月二十七日、大澤先生は、谷川合宿で確定した編集方針を廣池理事長に報告され、ぜひモラロジアンにこの本を読んでいただきたいという思いを伝えられ、ブックメイツに入れていただくことの承認

を得られました。三月二日には、下程息先生のもとに原稿を配置したファイルと手紙を送り、また、北川治男センター長、久楽一之次年度出版部長をはじめ、園内の六人の方々に、手紙を付して、ファイルを届け、委員会の目次案に対する意見を聞くことになりました。目次案に対するレスポンスが返ってきたところで、委員会の最終目次案を作成し、大澤先生にご覧いただきました。七月七日に、下程先生の業績を立木、初出一覧を足立さん、また、略歴を橋本さんで分担・調査したものが出来上がり、大澤先生にご覧いただきました。また、先生は、「ちちはは」という文章を是非入れたいのだが見つからないとおっしゃっておられました。これも見つけて収録することができました。八月三日には、再び下程息先生をお招きして、第二回目の会合が開かれ、進行状況を報告させていただきました。

二〇〇四年八月二十六日、大澤先生から電話があり、午後一時半に顧問室に来るようにとのことでした。伺うとすぐに私を伴って岩田啓成常務理事に面会に行かれました。大澤先生は当時、廣池学園顧問でしたが、モラロジー研究所常務理事の岩田先生に、下程先生の本をブックメイツに入れてもらえるように、お願いに行かれたのでした。理由は、出版部の方で、この本をブックメイツには入れないという判断が示されたからでした。大澤先生は、ぜひこの本をモラロジアンの方々に読んでいただきたいとの強い希望をもっておられ、廣池理事長に報告された際も、直接、ブックメイツに入れていただくことをお願いし、許可をいただいていたのでした。にもかかわらず、出版部の方針が、ブックメイツに入れないというものであったため、出版関係を取り仕切っておられた岩田常務理事を訪ね、直接、熱心に依頼され、確約を得られたのでした。

二〇〇四年九月二十九日から、初校原稿の校正がはじまり、大澤先生と出版部の加島亮伸さんと私の間

で、ほぼ毎日のように連絡を取り合うようになりました。十二月二十九日、大澤先生から電話をいただき、本の発行日を「平成十七年三月十七日」と下程先生の七回忌の日付にしたい、こうしておけば先生のご命日はここを見ればすぐにわかるから、とお話しくださいました。また、このとき先生は、「自分からも提案し、出版部の協力もあり、新年の仕事として」、「『所報』（平成十七年三月一日）に「下程勇吉著『廣池千九郎の人間学的研究』刊行の意義」という文章を執筆することにしたとおっしゃいました。

*

二〇〇五「平成十七」年二月七日、『研究』の納入が行なわれ、加島さんと一緒に大澤先生の顧問室に参りました。先生は、献本と贈呈について指示され、ご自身で墓前に『研究』をお供えに行くこと、また、広島の下程先生のご本家と戸山民俗資料館「以下、資料館と略す」に献本に行くことに決定され、私がお伴をさせていただくことになりました。墓参については、先生は、前日の三月十六日に京都駅の近くの新みやこホテルに泊まれ、十七日に、大澤先生と息先生ご夫妻と私が待ち合わせて、山科の随心院に向かうことになりました。随心院は、小野小町ゆかりのお寺であること、また、醍醐の一つ手前の駅から歩いて五分のところにあるといったことも、お話しくださいました。当日は午前中に墓参をすませ、弁当は車中で食べ、四時ごろまでに広島資料館に着きたいと考えておられました。このとき、故郷の方にはご迷惑をかけないようになりたい、お宅が近いならご挨拶に上がらせていただきたい、また、夕食の接待などは一切辞退させていただきますと申し上げるようにと承り、そのような文面の手紙を認めました。

二月十日には、息先生から、下程勇吉先生関係の贈呈先リストをファックスでお知らせいただき、加島さんの方から送っていただきました。二月二十四日には、箱入り本の贈呈先が確定し、三月二日に出版部か

ら、「一、廣池博士御靈前、二、廣池理事長、三、下程勇吉先生御靈前、四、下程勇吉資料館、五、下程息先生、六、下程先生ご本家用、七、麗大図書館下程勇吉記念文庫、八、研究センター、九、大澤俊夫先生、十、立木教夫先生」と記されたりリストをいただきました。二月二十六日、大澤先生から自宅に電話があり、「熊谷の柳瀬さんに、あなたの名前で、大澤所蔵の下程先生の写真を使わせていただいたとお礼の手紙を書いて、下程先生の本一冊と『所報』三月号を一部贈呈するように」と指示されました。

三月三日、大澤先生のご指示により、広島の大野敏勝先生と平田亨様に手紙を差し出しました。三月十四日には大野先生より電話をいただき、広島での移動の便宜を図っていただくことになりました。三月十七日、いよいよ下程先生のお墓にご著書を供えに出かけました。この日はトラブル続きで、皆様に大変ご心配をおかけすることになってしまいました。

*

大澤先生と下程息先生ご夫妻と私の四人で、三月十七日午前十一時に京都駅中央改札口で待ち合わせをして、小野の随心院にある下程勇吉先生のお墓に、『研究』をお供えすることになっていました。

私は、新幹線で京都駅に着き、二階の中央改札口を出たところで、大澤先生と落ち合うことができました。あとは息先生ご夫妻が来られるのを待つだけでしたが、十一時になっても、十一時十五分になってもおいでになりません。新幹線の中央改札口というのは一つではないので、ひよっとしたら一階の中央改札口にいらいっしやるかもしれないということで、二度見に行きましたが見つかりません。呼び出しのアナウンスも二回依頼しましたが、それでもおいでになりませんでした。その間、私は地下鉄の改札口を見に行き、大澤先生は下程先生のお宅に、三回、電話をかけられましたが、ずっと話し中で通じませんでした。

実は、この間、息先生ご夫妻は、烏丸中央改札口でずっとお待ち下さっていたのでした。そして、あまり遅いので、「ひよっとしたら大澤先生が体調不良で倒れられたのではないか」等々と心配くださり、大澤先生と連絡を取ろうと、八方手を尽くして下さっていたのでした。大澤先生宅、私の家、モラロジー研究所総合案内所、道徳科学研究センター、広島の大野敏勝先生宅と、息先生ご夫妻にお嬢様まで加わっていたいて、何とか連絡を取ろうとご心配いただいていたのでした。

原因は、京都駅には中央改札口というのが複数存在していることでした。大澤先生も私も、東京から新幹線で来て出たところということで、中央改札口というのは、当然、新幹線中央改札口と思い込んでおり、また、息先生ご夫妻は、小野に行くためには、地下鉄に最も便利な烏丸中央改札口と前提されていたのでした——しかも、単に中央改札口というときはこちらを指すのだということの後を後に教えていただきました。

大澤先生と私は、十一時四十五分まで待ち、雨が降っていましたので、タクシーで随心院に向かうことになりました。途中、献花用の小菊を買いました。お寺に着いたときは雨脚が激しく、跳ね返った雨で地面付近が白く煙っているほどでしたが、先生はお墓を目指してサッサと早足で歩いていかれました。墓前では、雨などちつとも気にせずに、傘を置いて、お墓に水をかけられ、献花を二つに分けて花入れにさし、お線香を上げられました。すでに花入れには新鮮な花が入っていましたので、息先生たちがお参りされたのかもしれないとおっしゃいました。先生は、墓前に新聞を敷いて、その上に濡れないように袋に入れた箱入りの『研究』とお菓子を供えて、長いこと、無言で拜んでいらっしゃいました。まだ雪が残っており、しかも、大雨の中での墓参でしたが、無事お参りをすませることができました。待たせておいたタクシーで京都駅に戻るとき、大澤先生は、「これで下程先生もお喜びくださるだろう」とおっしゃいました。

京都駅では、再び、新幹線中央改札口で下程息先生ご夫妻がいらっしやるかもしれないということで、探しましたが見当たりませんでした。いよいよ広島に向かうことになり、切符を購入し、寿司を買って乗り込みました。車中から広島の大野敏勝先生に電話をしましたが、新大阪を過ぎたところでは圏外でつながらず、岡山を過ぎたところでは話し中でだめでした。ついでの思い、家に電話しましたところ、妻が、「どうしたの。京都で下程先生は、十時四十五分から二時まで、待っていてくださったのよ」と、まくしたてられました。こちらも約一時間、待っていたことを説明し、妻のほうから、下程先生に連絡を取ってもらうことにしました。このことを、大澤先生にご報告しているうちに、広島に到着しました。

広島では、大野先生と、中川齋様がお出迎え下さり、車で駅から下程勇吉先生の故郷の戸山地区に向かいました。車が走り出したときにはまだ雨が降っていましたが、市内を走っている間に空はどんどん晴れてきて、きれいな青空になりました。広島市内を外れ、日光のいろは坂のようなくねくねとした山道を登って、ようやく戸山地区に入りました。資料館の前に三人の方々が出てこられて、われわれを出迎えてくださいました。「私が平田です。こちらが館長の松山さん、こちらが下程さんです」と、紹介されました。資料館の前で記念撮影をし、そのあと館内に入り、大澤先生は館長の松山様とご本家の下程精一様に『研究』を寄贈されました。数日前に公民館で「偲ぶ会」が催され、下程先生の展示物はみなそちらの方に移動してあるとのことでしたので、われわれも公民館に移動することにしました。

資料館とは異なり、こちらは大きくモダンな建物でした。正面の入口を入ったすぐのところに、展示コーナーがつくられており、下程先生の写真が四枚あり、若い頃の写真と、晩年の写真が対比的に取り揃えてありました。大澤先生は、若いときの写真をご覧になって、「これはめずらしい写真だ。ちょっと僕に似てい

る」とおっしゃいました。下程先生の手書きの原稿や、モラロジー研究所から資料館に寄贈された大学ノートが展示してありました。ノートは、モラロジーについて書かれたページが開かれていました。展示されていた著書は、大半がモラロジー研究所から寄贈されたものでしたが、中には、下程先生が愛読されたというゲーテの詩集もありました。

このあと、ご生家の跡を訪ねました。そこにはすでに他所の家が立っていましたが、下程精一様から「あのあたりに生家があったのです」と教えていただきました。

*

大澤先生は無事献本を済まされ、下程先生のご郷里を訪れ、一つ大きな仕事を成し遂げられ、充実した気持ちでいらつしやったことと思います。この後、大澤先生は、『所報』の三月号で『研究』刊行の意義を明らかにされ、また、麗澤大学教授の小田川方子先生に依頼され、「下程勇吉著『廣池千九郎の人間学的研究』を読んで——自己変革・聖人・神——」という書評を『モラロジー研究』第五十六号（二〇〇五年九月）に書いていただけるよう手配されました。

『研究』を企画し、出版し、お供えするまでの約四年の間に、大澤先生は、『伝記 廣池千九郎』（二〇〇一）〔平成十三〕年十一月二十日）、『大澤俊夫先生傘寿記念文集』（二〇〇五）〔平成十七〕年二月三日）、『廣池千九郎の人間学的研究』（二〇〇五）〔平成十七〕年三月十七日）、そして、『師の心を求めて』（二〇〇五）〔平成十七〕年四月五日）と、四冊も大部の著作を刊行されました。四月六日に、『研究』の完成記念会食を開いてくださり、その席で、『生誕百年 廣池博士記念論集』（一九六六〔昭和四十六〕年）で廣池博士の学問的業績を明らかにさせていただいたが、そこにはモラロジーが含まれていなかった。下程勇吉先生の

『廣池千九郎の人間学的研究』で、廣池博士のモラロジーを学問的に評価し位置づけていただいた。一九七二「昭和四十七」年から一九九四「平成六」年六月まで二十三年間、二週間に一回、京都から学園にお出で下さって、心を込めて研究していただいた成果が本書である」と、『研究』出版の意義を述べられました。

大澤先生は、二〇〇二年四月六日に豊子奥様を亡くされ、お寂しい中奮闘努力され、著作に魂を込めて行われました。二〇〇四年十二月二十二日に『所報』用原稿の口述を終えられたとき、電話をいただきました。私のメモには、「……きのう足に激痛／夕方八時／いつも足首へんが／おとといはじめてサロンパス／夕べ八時半痛くなった／天藤で夕食／たまに睡眠薬を二分の一粒／六時間／八時過ぎ／口述……」と記してあり、体調不良の中での口述であったことがわかります。

その後、大澤先生は、やるべきことはすべてやり終えたということをよく口にされるようになり、徐々に健康を損なわれ、二〇〇七年九月一日午後七時二十五分に永眠されました。先生が亡くなる一週間前の八月二十六日に、道徳科学研究センターの人たちと一緒に、先生のお見舞いをさせていただきました。病室のベッドを七十度くらいに起こされた状態で、先生にお目にかかりました。一人一人順番に先生のベッドの横に進み、声をかけさせていただきました。私も、「立木です。先生、お目にかかりました」と申し上げたとき、先生は大きく反応され、手を差し伸べてくださって、聞き取る事はできませんでしたが何事か私に語りかけてくださいました。いろいろとお世話になったことが思い出され、涙が溢れてきました。先生は、すでに相当お痩せになっておられました。まるでガンダーラ仏のような神々しさを湛えていらっしやいました。間もなく先生の一周忌を迎えるに当り、先生に声をかけていただき、引き立てていただきましたことに心から感謝申し上げ、『研究』編集の過程における先生のご尽力の一端を、記させていただきました。先

生のご恩に報いることができますようこれからも努力してまいります。まことにありがとうございました。

二〇〇八年八月十一日。